



第 34 回九州ジュニア選手権競技

競技報告 (2014/07/24-25)

写真と記事 : M. Kikutake

15~17 歳の部

男子 葛城史馬

(大分・宇佐高 2 年)

女子 三浦桃香

(宮崎・日章学園高 1 年)

ともに逆転で初優勝

大分県竹田市の久住高原ゴルフ倶楽部 (男子 7155 名、女子 6388 名、パー72) で 24、25 日の 2 日間行われ、15~17 歳の部男子は通算 4 アンダー、140 で並んだ 2 人によるプレーオフとなり、葛城史馬 (ふうま、大分・宇佐高 2 年) が清水大成 (福岡・東福岡校 1 年) を下し、初優勝した。

実力者がそろう注目の同女子は“高 1 世代”の一人、三浦桃香 (宮崎・日章学園高 1 年) が通算 2 アンダー、142 で初優勝した。



通算 4 アンダー 140

葛城は清水大成 (福岡・東福岡校 1 年) をプレーオフで下す

男子は 49 人 (欠場 1 人) が出場。葛城、清水とともに初日 71 で首位に 2 打差の 3 位タイでの最終日だったが、いずれも 4 バーディー、1 ボギーの 69 で回り、プレーオフにもつれ込んだ。そのプレーオフは 1 ホール目の 10 番 (パー5) で、清水が 2 打目を OB として万事休す。3 オンでパーとした葛城が勝利を手にした。1 打差の 3 位は前年優勝の今野大喜 (福岡・柳川高 3 年) で連覇はならなかった。

女子の三浦は通算 2 アンダーで逆転勝利

女子は 40 人が出場 (欠場 1 人) で、日本ゴルフ協会 (JGA) ナショナルチームメンバーの勝みなみ (鹿児島高 1 年) は欠場した。今年の九州女子選手権を制した田中瑞希 (熊本国府高 1 年)、昨年の九州女子優勝の新垣比菜 (沖縄・興南高 1 年)、そして、先の日本女子アマで九州勢最高位のベスト 4 と“すい星”のように飛び出してきて注目の三浦…と話題の多い 15~17 歳女子だった。

初日は天本遥香 (福岡・第一学院高 1 年) が 2 アンダー、70 で単独トップに立ち、1 打差で三浦、さらに 1 打差の 3 位タイに篠原真里亜 (福岡・沖学園高 3 年)、三ヶ島かな (同) ら実力者が控えた。最終日。三浦は 2 番でボギーを打ったがその後立て直し 6 バーディー、5 ボギーの 71 で回り、4 バーディー、3 ボギー、1 ダブルボギーの 73 とした天本に逆転、2 打差をつけて勝った。通算イーブンパー、144 の 3 位タイに三ヶ島と淵野ひかる (大分高 3 年) の 2 人。

この試合の結果、第 20 回日本ジュニア選手権 (8 月 20 日から、霞ヶ関 CC) の出場資格を得たのは、男子の 8 位タイまでの 14 人と、15 位タイの 5 人のうちマッチングスコアカードで選ばれた 3 人の計 17 人。女子は 8 位タイまでの 10 人と、11 位タイの 5 人の中からマッチングスコアカードで選んだ 3 人の計 13 人。



“高1世代”に新星登場

三浦桃香 次は日本ジュニアへ挑戦

九州ジュニア界の女子高校1年生世代は、まさに“群雄割拠、の時代になった。女子プロツアーを15歳という史上最年少で制した勝みなみ（鹿児島高）や九州女子選手権優勝の新垣比菜（2013年、沖縄・興南高）、田中瑞希（2014年、熊本国府高）…。みんな高1だ。

そして、三浦は今年、九州女子選手権25位タイで出場した日本女子アマチュア選手権で決勝マッチプレーに進出したところか、ベスト4の成績。一躍注目されていたわけだが、第一人者の勝がJGAナショナルチーム宿舎で不在とはいえ、その期待にたがわず天本遥香（福岡・第一学院高1年）と激しい優勝争いを演じて優勝を勝ち取った。

勝因を聞くと、「(得意な)パットがよく決まってくれた」と振り返った。3パットを3回もしながら、6パーディー（5ボギー）とまとめたのは、「試合前、調子が落ちていたから集中して練習した。今日は、ロングパットも寄せるんでなく、入れに行ったのがよかった」と言う。

優勝は意識してなく、「とりあえずは無理せず（日本ジュニアへの）予選が通ればと思っていた」そうだが、6月の日本女子アマに続き、初めて挑戦した7月の女子プロツアー、サマンサタバサ・レディースではベストアマ。着実に刻んだ一歩だろう。

宮崎市出身。身長168cmのすらりとしたからだ。母親に勧められての9歳からのゴルフ。この夏はビッグチャンスにも手をかけた。「自分らしいゴルフができれば…。日本ジュニアへの抱負をそう答えた。

(写真は三浦のショット)



天本遥香（初日首位から逆転負け） 優勝を狙ってたから、悔しい。スイングを安定させることやショートゲームをもっと練習しないと。課題が見つかった大会になりました。

葛城史馬「崩れた方が負け」引き締めて勝ち取った栄冠

○…プレーオフ（PO）1ホール目。清水大成が第2打を左にOB。葛城は3オン、2パットでパーをセーブし、5オンだった清水がギブアップして決着した。

7月の日本アマではマッチプレーに進出し、ベスト8と健闘。「マッチプレーは崩れた方が負けということを学んだ。POもマッチプレーと一緒に。粘ってパーを拾い、チャンスがあれば攻める、と心がけた結果」と言う。

最終日は清水とともに首位に2打差でのスタート。その首位をいく近藤大将（福岡・柳川高2年）が前半43で脱落。そんな中で葛城、清水のマッチレース模様となり、前半の1打ビハインドを葛城は「後半勝負」と攻めのゴルフを展開、結局は69の同スコアでホールアウトし、POにもつれこんでいた。

身長164センチ、体重66キロ。アスリートとしてはやや小柄だが、ガッチリとした体格。シーズン前は、「(勝負を左右する)アプローチ、パットの練習を徹底してやった」と言う葛城で、「今日はそれが生きてきました」とも。この後は、ショットの精度を高めるのももちろんだが、もう一つ、「体力をつけること」も課題に掲げ、もう一つ上のランクに挑戦する。



12～14 歳の部も逆転劇

男子 篠原 剛

(福岡・沖学園中3年)

女子 千葉 華

(沖縄・小禄中3年)

12～14 歳の部の優勝は男子が通算3オーバー、147の篠原剛(福岡・沖学園中3年)、同女子は通算3オーバー、147の千葉華(沖縄・小禄中3年)で、ともに逆転での初優勝だった。

通算3オーバー 147

篠原は3打差を逆転

35人が出場した男子は初日、ただ一人のアンダーパー、71で回った井戸川純平(宮崎・吾田中2年)が単独トップに立った。しかし、最終日は大きくスコアを崩した。16番でホールインワンを記録したものの、その後は乱調。結局78をたたいて後退。代わって浮上したのが篠原剛。首位に3打差、3位タイのスタートだったが、3バーディー、4ボギーの73と手堅いゴルフで逆転勝ちした。

2打差の2位タイは池田悠希(長崎・崎辺中2年)と井戸川、さらに1打差の4位タイに山本竜也(大分中3年)と宮里拓弥(沖縄・那覇中3年)の2人だった。



篠原剛 攻めのゴルフで初タイトル

実家はコースにほど近い九重町。その地元で、自身初めての九州規模の大会での優勝だ。いつもはちょっとシャイなところがある中学生だが、スコアカードを提出して、「逆転(優勝)を狙っていました。勝てそうな気がしていた」と元気な答えが返ってきた。

この日のラウンドを振り返ってもらうと、「パターがよかったし、ドライバーもフェアウエーをほとんど外さなかった」と言う。首位とは3打差で、その首位の井戸川純平がインスタートの16番でホールインワンを達成。1打差に縮めていたのが3打差に戻ったが、慌てることなく、「冷静にやれました」。結局は後半42と崩れた井戸川に逆転勝ちした。

既に九州ジュニアを制している真里亜、仕師命(はじめ)のいとこに、これで追い付いた。この1年、筋トレに力を入れたことでドライバーの飛距離が20ヤード伸びて270ヤードに。すっかり自信もついたようで、「日本ジュニアでも優勝できるように頑張ります」と力強かった。

通算3オーバー 147

女子の千葉は4打差を逆転

女子は35人が出場。そんな中で初日、イーブンパーの72で単独首位に立ったのが大分中1年の園田由利亜。これを2打差の74で山内優希(福岡・次郎丸中)、萱野桃春(同・宇美南中)、小貫麗(熊本・帯山中)の3年生と呉屋杏佳(沖縄・久志中2年)が追う展開となった。

最終日、園田が77とスコアを乱す中で、ベストスコアの71で回り、初日の8位タイから逆転して2打差をつけて優勝したのが千葉だった。2位は園田で、さらに2打差の3位タイに後藤未有(福岡・沖学園中2年)、鍋島海良(熊本・菊陽中3年)、山内、小貫の4人。

第20回日本ジュニア（8月20日から、霞ヶ関CC）の出場資格を得たのは、男子は上位7人とシードの芹澤慈眼（大分・庄内中3年）。女子は10位までと11位タイの2人のうち、マッチングスコアカード方式で選んだ1人の計11人。

千葉華 おみくじに『油断大敵』と。戒めて手繰り寄せた初優勝

○…初日は76のスコアで8位タイ、首位に4打の差があったのを、最終日はただ一人のアンダーパー、71をマークして逆転勝ちした。

初日が終わって、「順番でいったら私は上から12番目くらい。このままでは（日本ジュニア出場も）危ないなと思った」そうだが、気を入れ直して手繰り寄せた勝利。「実は、試合前、阿蘇神社にお参りしておみくじを引いたら『油断大敵』とあったんです。だから…」と笑わせた。

小さいころ、宮城から沖縄・那覇市に移住。ゴルフは5歳のころ、母親の勧めで始めた。得意クラブはウッド系。今大会は苦手のパットを「凄く練習してきた。それがよかった」と振り返り、日本ジュニアでは、「九州での優勝がまぐれと言われられないようなプレーをしてきたい」と話してくれた。